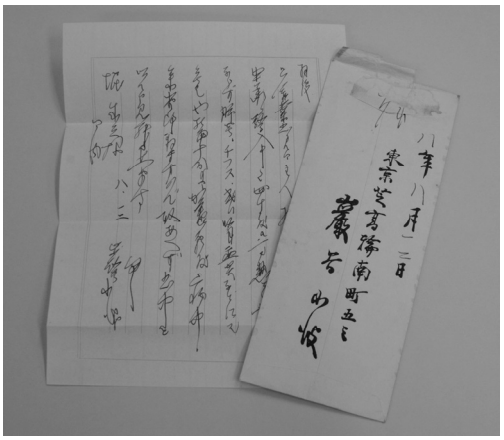
港区立 港郷土資料館

資料館だより

第 74 号
2014.9.30

コーナー展予告

港区ゆかりの人物　～巌谷小波（いわやさざなみ）～



左：巌谷小波書簡 堀成之あて
（昭和 8 年 8 月 12 日付）

右：漣山人（巌谷小波）著
『こがね丸』（復刻版）

巌谷小波（1870-1933　本名：季雄（すえお））は、貴族院議員で、書家としても知られた巌谷一六（いちろく）の三男に生まれました。明治 37 年(1904)34 歳の時、出生地の麹町区（現 千代田区）から青山北町三丁目(現 北青山二丁目)に転入。翌年、高輪南町 47 に移転し、明治 40 年(1907)には、高輪南町 53（現 高輪 4-1-18　東京都旧跡）に家を購入して永住の地と定めました。63 歳で没するまでの後半生の拠点が区内にあった、港区とたいへんゆかりの深い人物です。

巌谷家は代々、近江国（現 滋賀県）水口藩の藩医であったため、小波は医師を目指すようにと求められていましたが、明治 20 年(1887・17 歳)、尾崎紅葉が主催する文学結社・硯友社（けんゆうしゃ）に入り、文学の道を歩み始めました。

日本の近代児童文学の創始者としてその功績が知られていますが、20 歳頃から没年までの長きにわたる、俳人としての活動にも注目すべき側面があります。尾崎紅葉と結成した「紫吟社（むらさきぎんしゃ）」や、角田竹冷を盟主とした「秋声会（しゅうせいかい）」に参加、ベルリン留学中には俳句同好会「白人会（はくじんかい）」を主催するなど、俳句を通じて、多くの文学者や画家、さらに政財界人や医師等々広い交友関係をもちました。また、彼の主宰した文学研究会「木曜会」には硯友社社友や、俳人、画家、編集者などが集まり、まだ新人だった永井荷風も参加して交流を深めました。

小波は、社交的であっただけでなく、友人知人はもとより後進にも親しまれる、寛容で明朗温厚な人物であったといいます。

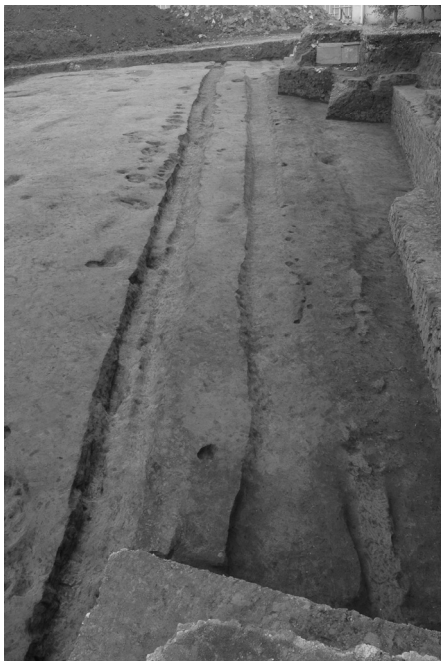
10 月 29 日（水）から 12 月 17 日（水）までのコーナー展では、館蔵資料の紹介により、巌谷小波の仕事と人物像を概観します。

麻布の中世古道

駒形　あゆみ
（学芸員）

今年（平成26年）９月に開館した麻布子ども中高生プラザ（港区南麻布四丁目６番所在）の建設に先駆け、平成18年６月から平成20年３月にかけて、埋蔵文化財の発掘調査が行われました。ここは今でこそ舌状台地の頂部から南へ下る緩やかな斜面に立地しているように見えますが、寛文２年（1662）に、石見（いわみ）国津和野城主亀井家がこの地を拝領した際、北側にあった谷を埋める大規模な造成を行い、中屋敷地として整備したことが調査の結果明らかになりました。

さらに注目すべきことに、亀井家が造成を行う以前の層位から、古い道の跡（道路状遺構）が発見されました。道幅は、最も広いところで1.2m程です。この遺構は南北方向に延び、南側はそのまま古川の方へ下っていったと考えられます。北側もかつて存在した谷に沿って下っていくものと推定されました。



石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡
道路状遺構（187号遺構）

この遺構には、自然堆積層を整地して作り出された硬化面があり、ローム土などの塊を突き固める工法で整備されたと考えられます。これと類似した遺構が豊島区の染井地区遺跡でも発見されており、中世に位置付けられています。また、この遺構に伴って出土したわずかばかりの遺物の中には、16世紀後半代の陶器の破片が含まれていました。こうしたことから、この遺構は中世以来の古道であると判断されました。亀井家が当地を拝領する直前まで､道として機能していたようです。

麻布地区の中世の遺跡で代表的なものには、善福寺寺域遺跡(港区遺跡番号115)があります。この遺跡からは、板碑が残置された地下式坑などの中世の遺構と、板碑のほか羽釜や瀬戸・美濃系陶器などの中世の遺物が発見されています。

また､今回の調査地の南方､麻布本村町には、15世紀から16世紀に移り住んできた人々によって開発が行われたという伝承も残っています。中世後期の麻布地区は、古代に創建された善福寺とその周辺に形成された集落を中心としていたと考えることができます。

今回発見された道路状遺構は、麻布地区と渋谷地区を結ぶ道と想定されています。中世の東京湾岸には、鎌倉街道下ツ道や鎌倉街道中ツ道があり、これらの発掘調査の事例は、近年蓄積されつつありますが、それ以外の一般的な中世古道に関する調査事例はほとんどありません。

中世の麻布地区は、文献から江戸氏一族の活動をわずかに垣間見ることができますが、有力な開発領主や在地領主の存在を窺い知ることはできません。それは、麻布地区が起伏に富んだ地形で、耕作地に適した土地が少なかったことによると考えられています。しかしながら、中世、麻布で活動した人々の痕跡は発掘調査で確実に発見されています。この地で彼らの生活が営まれていたことは間違いありません。今回の調査で発見された中世の古道も、当時の人々が日々往来していた道であると考えられます。

資料紹介

三河国西大平藩の返済証文

竹村　到
（文化財保護調査員）

本年（平成26年）４月、全10点からなる「内田隆子氏旧蔵文書」を寄贈していただきました。これは、芝田町五丁目（現 三田三丁目）で地廻り米穀問屋と脇店八ヶ所組米屋を営んでいた内田家（屋号は山田屋）に関する文書群です。

地廻り米穀問屋は東北・関東の米を取り扱う米問屋で、脇店八ヶ所組米屋は小売商である春米屋に米を販売する米仲買の一種です。江戸時代、芝周辺には米問屋・米仲買が多くありましたが、山田屋は問屋と仲買を兼業する現在の卸商のような米屋でした。

この文書群の一通に、三河国西大平藩（一万石）が安政４年（1857）に山田屋へ提出した返済証文があります。西大平藩は、テレビの時代劇や講談「大岡政談」で有名な大岡越前守忠相が、寛延元年（1748）に大名に取り立てられた際にできた藩です。

証文の２行目に「金百弐拾両也」とあり、米を購入した時の残金120両が示されています。当時の支払いは、季節の変わり目や年末にまとめておこなうのが一般的でしたから、本来ならば米の購入があった嘉永６年（1853）に全額が支払われるはずです。しかし、何らかの理由でこの年まで支払いが滞っていたのでしょう。

そのため、西大平藩と山田屋の双方が相談して返済額と返済方法の確認をおこない、この証文が作成されたものと考えられます。

120両の返済方法は、まず証文を交わした時点で頭金として15両を支払い、残金がなくなるまで毎年７月と12月にそれぞれ10両ずつ（一年間に20両ずつ）返済するというものでした。

ところで、西大平藩はなぜ米を山田屋から購入する必要があったのでしょうか？ 証文には「嘉永六丑年中家中の扶持米を買い入れ候」とみえ、嘉永６年に藩士へ与える扶持米として購入したことがわかります。つまり、西大平藩は藩士への扶持米を年貢米からではなく、米屋から購入して渡していたことになります。

推測になりますが、藩の陣屋は西大平（現 愛知県岡崎市）に置かれていたものの、所領は複数の場所に分散されていたので、年貢を米でなくお金で納めさせていた可能性も考えられます。もしそうならば、西大平藩は扶持米を毎年米屋から購入していたのかもしれません。

↑「差入申一札之事」（内田隆子氏旧蔵文書）

「差入申一札之事」翻刻文 →

差入申一札之事

一　金百弐拾両也

右は嘉永六丑年中家中扶持米
買入候処、右代残金追々相御気之毒存候、
此度御対談之上、書面金高之内当金拾五両
相渡、残金之儀は七月・十二月金拾両宛
一ヶ年金弐拾両と相定、皆済迄無相違御渡
可申候、為後日一札仍如件

大岡越前守内
安政四丁巳年閏五月　元〆　井上弥五郎（印）
大元〆　小瀬大輔（印）
用人　郷古司馬（印）
用人　梅村左織（印）

山田屋友八殿

前書之通相違無之候、以上

家老　小林豊助（印）

軍神と六本木
―広瀬武夫記念碑―

杉本　絵美
（文化財保護調査員）

六本木交差点から500ｍ程離れた場所に妙像寺というお寺があります。お寺の門を抜けると、高さが３ｍ近くある大きな石碑が目に留まります。この石碑は、日露戦争における旅順口（りょじゅんこう）閉塞作戦に従事し戦死した軍人、広瀬武夫を記念して建てられたものです。

広瀬は明治元年（1868）、豊後国直入郡竹田町（現 大分県竹田市）で生まれました。明治18年、芝新銭座及び芝神明町（ともに現：港区浜松町）にあった攻玉社（こうぎょくしゃ）を卒業し海軍兵学校へ入学、明治22年の卒業後、海軍士官としての道を歩みます。明治30年には海軍軍令部に出仕、同じく海軍軍令部に勤務していた秋山真之に誘われ、２、３ヶ月ほど麻布霞町（現：港区西麻布）で同居しました。その後８月にロシアへ留学するまでの間、麻布今井町（現 港区六本木）にある妙像寺で下宿生活を送りました。

広瀬は明治35年にロシアから帰国、その２年後の明治37年に日露戦争が始まります。開戦後まもなくして、日本は３度にわたり旅順口閉塞作戦を実行します。これは老朽船に石などの重しを詰め込み、旅順港の入口で船を沈めてロシア艦隊を港内に封じ込めるという作戦です。広瀬（当時は少佐。死後中佐に昇格。）は第１回作戦では報国丸、第２回作戦では福井丸の指揮を執ります。第１回閉塞作戦では報国丸を沈め無事帰還しましたが、第２回の閉塞作戦において自爆する福井丸から撤退する際に、艦内で行方不明の部下を３度も捜索し、脱出用のボートに乗り移ったところでロシア軍の攻撃に遭い戦死しました。

妙像寺の石碑は、昭和11年（1936）の本堂の再建にあわせて当時の住職の発願により建てられたもので、上段に広瀬中佐が詠んだ漢詩、下段に石碑建立の由来が刻まれています。昭和20年５月の空襲により本堂は焼失、石碑も火を受けたということで、その影響か現在の石碑は右側面が一部欠損しています。漢詩は「七生報国　一死心堅　再期成効　含笑上船」というもので、第２回閉塞作戦にあたり、国恩に報い２度目の成功を期したことを詠んだものです。また、石碑の傍らには高さ・幅が40cm前後、奥行き10cmほどの角ばった石が置かれ、よく見ると石の正面に「旅順港口閉塞船報国丸搭載之石」と刻まれており、日露戦争後に沈没した船から引き揚げられた石の一つであることがわかります。

これらの閉塞作戦ではロシア艦隊を旅順港に封じ込めることができず、実際には失敗に終わりました。しかし、広瀬は勇敢な死を遂げた英雄として伝えられ、「軍神」と呼ばれるようになります。神田万世橋に銅像が建てられ、国定教科書の唱歌にも歌われました。昭和10年には故郷竹田町に広瀬神社が建てられるなど、「軍神」広瀬は国民的英雄として人気を得ます。妙像寺の石碑はこのような国内の風潮の中で建てられたものであり、当時の世相を物語る一つの歴史的資料といえるでしょう。

なお、広瀬の墓は青山霊園（港区南青山）と生誕地の近くにあります。

参考文献：
『広瀬武夫全集』上・下巻
1983年 講談社

広瀬武夫記念碑（妙像寺）

近代美術教育と港区
― 生巧館（せいこう）から葵橋（あおいばし）洋画研究所へ ―

大坪　潤子
（文化財保護調査員）

石膏像やモデルを木炭でデッサンする――。デッサンの基礎として現在は一般的な方法です。これは明治20年代中頃から、当時の美術教育で行われていた写真や版画の模写に対して黒田清輝（1866-1924）が広めたものでした。黒田は近代洋画の父と称されますが、その教育活動に関わる港区内の人や場所に目を向けてみましょう。

黒田は留学先のフランスから帰国した翌年の明治27年（1894）、画塾・天真道場を開きます。芝区桜田本郷町14番地（現 港区新橋一丁目1番地または西新橋一丁目2番地）にあった、画家・山本芳翠（1850-1906）の画塾と版画家・合田清（1862-1938）の製版所から成る「生巧館」を譲り受けてのことでした。山本と合田はフランスで黒田と親交を結び、明治20年に帰国して山本の下絵、合田の製版という共同制作で書籍や教科書の挿絵、新聞の付録などを手がけ成功しました。明治21年7月の会津磐梯山噴火の際は、東京朝日新聞の委託で《磐梯山噴火真図》を制作し、災害を広く世に伝えています。

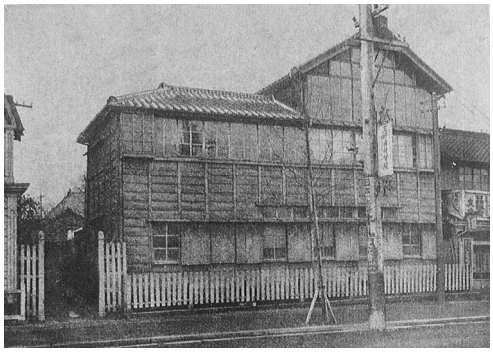
天真道場は明治29年に東京美術学校（現 東京芸術大学、以下東美）で西洋画科が設けられ黒田が教授に就いたことや、黒田らが美術団体「白馬会」を設立したことにより閉じられますが、明治32年、赤坂区溜池町3番地（現 赤坂一丁目3番地）に移っていた合田の製版所の一部に白馬会（溜池）洋画研究所が置かれます。東美卒業生の研究の場が必要とされたのでした。後に白馬会会員が本郷にも二つの研究所を設けましたが、いずれも、黒田がフランスで学んだ実技指導や講義の内容を反映した教育をおこなっていたと考えられています。

溜池の研究所はその後、白馬会葵橋洋画研究所と名を変えます。「葵橋へ移転」とされることもありますが、明治44年の『日本美術年鑑』や大正初期の印刷物に葵橋洋画研究所の所在地が溜池3番地と明記されていることから、位置はそのままだと考えられます。また、葵橋という正式な地名はありませんが、同地は外濠（ほり）にかかっていた葵橋の正面にあたります。

葵橋の研究所については、昭和16年（1941）発行の『赤坂区史』に、白馬会会員だった岡野栄（1880-1942）の「二階家で広くもないが、白馬会といふ看板を掲げて、表通りから玻璃（ガラス）窓越しに、石膏肖像だの、生徒の絵画練習が見えた」という貴重な回顧談が収められています。

研究所は次第に美術の道を目指す者の予備校的存在となっていったようで、多くの若者達が集い学びました。陶芸家の浜田庄司も、学生だった大正初期に三田通りの自宅からこの研究所へデッサンのために通っていたそうです。

葵橋洋画研究所は白馬会の解散（明治44年）後も存続したものの、関東大震災（大正12年/1923）後に姿を消しました。しかしここでの教育は、今でも全国に根付いています。



「葵橋研究所全景」『葵橋研究所展覧会記念』1916年
東京文化財研究所　所蔵

参考文献：藤本韶三「葵橋洋画研究所の頃」『絵』213、日動出版部、1981年11月/金子一夫『近代日本美術教育の研究　明治・大正時代』中央公論美術出版、1999年/田中淳『画家がいる「場所」近代日本美術の基層から』ブリュッケ、2005年

コーナー展

港区指定文化財 館蔵資料 宇田川家文書

― 肥後熊本藩細川家御用達商人の記録―

平田　秀勝
（文化財保護調査員）

平成25年度、港区指定文化財となった『宇田川家文書』は、昭和61年（1986）に区内在住の宇田川家より当館へ寄贈された資料です。江戸時代、下高輪證誠寺門前（現在の高輪二丁目2番辺り）に住居し、仕立職を営んでいた宇田川家は、代々「革屋八郎兵衛」を名乗り、肥後熊本藩細川家に出入りする御用達商人を勤めていました。

資料の点数は約50点、年代は宝暦5年（1755）から大正3年（1914）までに及びます。その多くは幕末から明治にかけてのものですが、江戸期の家業や土地・不動産に関するもの、明治以降の細川家と宇田川家との交流を示す文書の他、大名屋敷に出入りするための通行手形にあたる「御門出入札」も残されています。今回のコーナー展では、館蔵資料『宇田川家文書』より、大名家に仕えた御用達商人の記録を紹介しています。

「御用達」とは、幕府や大名家などの御用を勤め、出入りを許された特権的な町人のことです。江戸時代、食料品から衣類、武具などの購入、大工や庭師にいたるまで、幕府や大名屋敷に関わるものには、さまざまな商人・職人が定められています。江戸には、参勤交代制度によって、全国300家余りの大名とその家族、家臣団が生活する上屋敷・中屋敷・下屋敷といった大名屋敷が置かれていました。そのため、各大名家の御用達を勤める商人・職人が数多くいたことが知られています。

宇田川家こと「革屋八郎兵衛」も、そのような町人の一人でした。革屋八郎兵衛の住居と店があった下高輪證誠寺門前は、承応２年(1653)、證誠寺とともに、西久保（現在の虎ノ門辺り）から細川家下屋敷に隣接する高輪に移転してきました。細川家下屋敷は、寛永21年（1644）に拝領したもので、文政10年（1827）、中屋敷となりました。この屋敷は、『忠臣蔵』で名高い大石内蔵助ら17名の赤穂浪士が吉良邸討ち入り後に預けられ、元禄16年（1703）2月4日、切腹となった場所でもあります。

宇田川家が、どのような経緯で細川家の御用達商人となったかは不明ですが、文化７年（1810)、細川家奥御納戸役人へ提出された文書「乍恐以書附奉願上候」によると、「高祖父八郎兵衛儀、寛文五乙巳年（1665)、御出入り仰せ附けられ、御召し物御仕立御用仰せ附けられ」とあります。江戸時代を通して細川家の御用を勤め、資料によると、藩主やその子息の着物の仕立て、甲冑の手入れなどを行っていたことがうかがえます。

明治維新を迎え、幕藩体制が崩壊すると、大名家と御用達の関係も大きく変化し、それまでの御用勤めが途絶えてしまうことも少なくありません。しかし、宇田川家では、細川家より長年の御用勤めを賞され、明治18年（1885）に桜紋付（細川家替紋）の羽織と小袖を、明治25年に九曜紋(細川家家紋)の羽織を贈られました。また、明治35年、「革屋八郎兵衛」名義で、先に拝領した桜紋付の羽織・小袖の着用願いを細川家へ提出し、その日のうちに許可されています。これは、かつての大名家と御用達という関係が解消された後も、両家の間に交流は続いていたことのあらわれといえるでしょう。

宇田川家文書は、大火や震災、戦災により消失の著しい江戸町人・商人に関する資料にして、江戸時代、大名家に仕えた御用達の商業活動や生活の一端、明治以降の旧大名家と元御用達との関係を考える上にでも貴重な資料です。港郷土資料館では、今後も展示などを通じて館蔵資料の紹介に努めます。

進路への扉
―夏休み学習会から東京海洋大学へ―

石川　新
（東京海洋大学海洋科学部海洋環境学科１年）

私は、平成18年（2006）、当時小学5年生の時に港区立港郷土資料館と東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館の連携事業として開催された夏休み学習会「人とクジラのものがたり」に参加しました。その前から、生物のことが大好きな小学生でした。しかし、自宅から近いものの東京海洋大学にはそれまで訪れたことはありませんでした。小学生が自主的に内部を見学するには些か敷居が高かったのです。ですから、夏休み学習会で初めて海洋大の構内に入り、どういった場所なのかを知りました。学習会に参加した目的は、「クジラについてもっと知ろう」というテーマに惹かれたからと、夏休みの自由研究のためでした。

夏休み学習会では、海洋大教授の加藤秀弘先生による鯨の話が強く印象に残っています。一例として、クジラは偶蹄目であり、カバに近い仲間であるという話や、クジラの祖先がどのように水中生活に適応した体へと進化していったかという話をして下さいました。当時、このクジラの水中適応の話にとてもワクワクして、紹介されたクジラの祖先、“アンブロケタス”に夢中になりました。

夏休み学習会での加藤先生のお話は、話す対象が小学生であるからといって簡易な内容ではなく、とても専門的な内容でした。一方で、難解な話を進めるのではなく、子供にも分かりやすく、かつ惹き込まれるようなお話で、よく理解することができました。クジラについて夏休み学習会で初めて学んだことは数多くあります。その後、大学入学後に加藤先生によるクジラについての授業があったのですが、内容がほぼ学習会の時と変わらず驚きました。

海洋大には水産資料館という、大学附属の小さな博物館があります。夏休み学習会で案内してもらい、クジラの胎児やラブカ（深海性のサメの一種）の標本を見て感動しました。その後、この学習会を契機として、私は中学、高校時代、水産資料館や海洋大図書館にしばしば訪れました。さらに、海洋大が開く公開講座などのイベントにも通うようになりました。

これらの経験によって海や湖沼、水産生物への興味が膨らみ、海洋大への進学を考えるようになり、入学に至ったのです。

学習会を通して、私がクジラをはじめとする水産生物に対してより強い関心を有するようになったことは言うまでもありません。さらに、自分も専門的なことを、多くの人に分かりやすく、また、興味をもってもらえるように伝えられる研究者や学芸員になりたいと志すようになりました。現在、私は、生物、特に魚類の進化や生活史、Biodiversity（生物多様性）に興味を持っています。大学の授業ではまだ１年生であるため、基礎的な科目が中心です。授業以外では、水産資料館や図書館で文献や標本を見るほか、大学の係船場（ポンド）で実際に生物を採集して観察することもあります。これから、夢の実現のために魚類学や鯨類学といった専門科目や学芸員になるための勉強に努めていきたいと考えています。

最後に、私の進路を決める上で大きな機会となった夏休み学習会を企画された、港郷土資料館と水産資料館の方々にお礼申し上げます。そして、大学生として今回学習会を手伝う側となれたことを嬉しく思います（※裏表紙参照）。

自分がそうであったように、小学生にとって夏休み学習会は、入りづらい場所、学びにくいテーマへの扉となると感じます。このような体験を通じて何かに興味を抱くことは、子供達にとって、とても有意義であり、今後ともぜひ継続、拡大して頂きたいです。

事業予定（平成26年10月～）

コーナー展

・「港区指定文化財　館蔵資料　宇田川家文書―肥後熊本藩細川家御用達商人の記録―」
　開 催 中 ～ 10月11日（土）　p.6参照
・「港区ゆかりの人物～巌谷小波～」10月29日（水）～12月17日（水）表紙参照
・「港区の遺跡－最近の発掘調査成果から－」12月19（金）～平成27年2月18日（水）
・「指定文化財展」　平成27年2月20日（金）～3月18日（水）

講座など

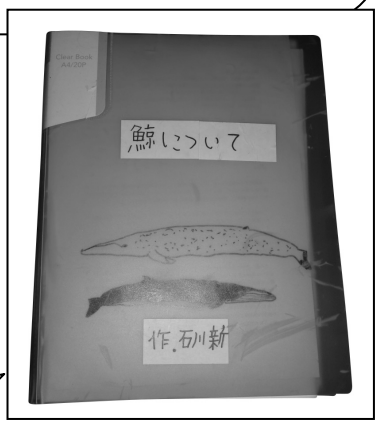
・土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」12月13日・平成27年2月14日
・第一回資料館講座「東国の戦国時代（仮）」（全３回、金曜日）平成26年11月（予定）
・第二回資料館講座（全３回、金曜日）　平成27年2月（予定）
・親子学習会（全２回、土曜日）　平成27年3月14日・28日（予定）

・各事業の詳細は、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問い合わせください。
・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室でおこなっています。

事業報告（平成26年3月～平成26年9月）

①資料館講座「銅像になった人物とその時代　－芝公園界隈－」（2月14日・21日・）3月1日
②親子学習会「日本庭園にふれてミニミニ石庭（枯山水）を作ってみよう！」3月8日・22日
③コーナー展「指定文化財展」（2月21日）～3月19日
④土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」
　5月31日、7月26日、9月13日
⑤「平成25年度新収蔵資料展」4月18日～6月18日
⑥「宇田川家文書展」7月18日～10月11日
⑦古文書講座　7月4日、11日、18日、25日、8月1日
⑧夏休み体験ミュージアム
「チャレンジ！　縄文土器を作ろう」7月23日・8月20日
⑨港郷土資料館・東京海洋大学附属水産資料館連携事業
　夏休み学習会　～東京湾　自然と人～
「クジラ博士になろう！」　8月7日・8日

※今年の夏休み学習会でお手伝いをしてくださった東京海洋大学の学生の中に、平成18年度の夏休み学習会に参加した石川新さんがいました。当時小学校5年生だったそうです。そのときのテーマもクジラで、p.7に石川さんが書いてくださったように、夏休み学習会が進路を決める契機となったとのことです。
企画した学習会が何かに興味を持つ機会となったことを知り、職員一同とても嬉しく思っています。



石川さんの小学生時代の自由研究「鯨について」

港区立港郷土資料館の利用案内

交　通　JR「田町」駅下車徒歩5分，都営地下鉄「三田」駅下車（A3出口）徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分，港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分，「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間　9:00～17:00　《入館無料》
休 館 日　日曜日・祝日・第3木曜日
年末年始・特別整理期間

<さわれる展示室開室時間（夏休み期間をのぞく）>
毎週　火・金・土曜日　12:30～16:30

『資料館だより』第７４号
平成26年（2014）9月30日発行
編集・発行　港区立港郷土資料館
〒108-0014
東京都港区芝５－２８－４
Tel.　03-3452-4966
Fax.　03-5476-6369
http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/
刊行物発行番号　26097-7541